

〈書評〉

## 靖国神社と近代日本の歴史記憶の問題

ランベッリ・ファビオ

John Breen 編, *Yasukuni: The War Dead and the Struggle for Japan's Past*. London: Hurst Publishers Ltd., 2007

近代国民国家の成立に伴う大きな課題の一つは、その形成過程（独立や統一運動、領土を獲得するための戦争、帝国主義的な営みなど）において戦没した人々を記憶（追悼・記念）することである。一般的には、国家のために犠牲になった人々は英雄視され、彼らのために、特別な儀礼の体系と記念・記憶装置が設けられる。（近代国民国家の著しい特徴の一つは、その形成に関わったとされる人々は、ほとんど男性である。女性は、いのちを捧げた英雄たちのお母さんや奥さん、または戦闘に立って怪我をした男たちの看護婦という、あくまでも補助的で二次的な役割しか認められないことが多い。）

しかし、このような「国家の英雄たち」の選抜も簡単な行為ではないし、その追悼・記念の仕方も文化や時代によって変わっていく。特に、国家の分離や併合、または抜本的な政治再編によって国家自体が変わっていくと、それまで英雄視された人たちやその役割を果たすのに選ばれた理由も当然、問いかけられるようになってくる。この意味では、国家の歴史は廃棄され忘却された無数の英雄たちの物語でもある。

いうまでもなく、日本も例外ではない。明治期に新しく成立した近代国民国家・日本の課題の一つはやはり、それに相応しい英雄たちの選抜、意味の付与と記憶装置（儀礼の体系や記憶の場など）の構築であった。当時、日本政府が選んだ方法は、古代の神話の再解釈を基盤に、「天皇」の神聖さを主張しながら、天皇の統治に役立った人物を英雄視し国家記念行為の対象にした。天皇を現神と見なす国家神道という枠組みの中で、神武天皇の降臨を祝う建国記念の日を定めて、天皇の名で戦没した人々という、多くの「英雄」たちを祀るようになった。

ところが、明治期から現在まで、日本という国家が大きく変わったにも拘らず、国家儀礼の体系においては、皇国史観の根本的な枠組みが本質的には否定されてこなかったのが、現代日本の顕著な特徴といえるだろう。国家の祭日の中でやはり、建国記念日、現天皇と前天皇の誕生日があるし、伊勢神宮、明治神宮、靖国神社など国家神道の骨格をなしていた神社がいまでも特別なものとして取り扱われている。

靖国神社とそれを取り巻く諸問題は、この独特の歴史背景の中で取り上げなければならない。そこで、2007年の末頃、ロンドン大学東方及びアフリカ研究所(SOAS)准教授、ジョン・ブリーン氏は、*Yasukuni: The War Dead and the Struggle for Japan's Past* (『靖国神社一戦没者と日本の歴史への闘争』)を編集し、英語で靖国問題をもっとも包括的な形で紹介する著書を刊行した。じつは、いままで靖国問題については、英語やその他のヨーロッパ系の言語では、数少ない論文しか存在しなかった。このためにも、この本は重要な意味をもつ。この本のユニークな発想は、靖国問題を多角的に取り扱い、対立する意見をもつ専門家の論文を集めることにしたというところにある。ブリーン氏が前書きで書くように、本書は「きわめて異なる意見を有する様々な解釈者の声を通じて、靖国問題の真の複雑性を紹介する」(xiv頁)目的をもつ。各論文のテーマは次のとおりである。

まず、ブリーン氏の序論「靖国の系譜」で、靖国神社の歴史、国家神道との関係、戦後における靖国神社独自の動向、A級戦犯の問題、総理大臣の参拝と国内外の反応など、いわゆる「靖国問題」のキーポイントをととても簡潔に紹介している。

第1章「行き詰まり—中日関係における靖国問題」では、イギリス・リーズ大学日本研究准教授 Caroline Rose は靖国問題——特に日本の総理大臣の靖国神社への参拝に対する中華人民共和国政府の批判的な立場やその理由を分析する。日本と中国とでは、靖国への参拝がそれぞれの異なる理由で国家体制や政府の正当化につながっている、とローズ氏が指摘する。特に中国共産党の統治は猛烈な反日ナショナリズムにその正当性を求める。日本の総理大臣が靖国神社へ参拝する度に、戦時中日本の軍事的帝国主義のイメージが操作され、日本の戦争責任問題が改めて引き起こされる。

第2章「靖国問題に関する宗教的視点」では、アメリカ・ジョージタウン大学日本文化教授、ケヴィン・ドウク氏は、カトリックとして、しかもアメリカ人としての個人的な管見を述べる。まず、戦時中のときからカトリック教会が靖国神社への参拝に好意的であり続けたことを紹介する。また、「靖国神社で崇拜されているのは、A級戦犯の行為ではなく、かれらの死後の魂そのものである」と主張する。最後に、論者が東条英機などA級戦犯の犯罪を批判する権利がないと述べ、死んだ人の魂の判断は神様が行うことであって、国家のために死んだ人のための慰霊・祈りは国家の代表の義務であるという。そこで、靖国

神社参拝は日本の総理大臣にとって「聖なるもの」との重要な出会いのきっかけであるべきだと結論づける。私が思うには、ある外国人の個人的な意見は、靖国問題全体の解明にはそれほど重要な貢献になるはずがないだろう。特に、カトリックの信者である論者にとって日本の戦没者の魂やその慰霊の仕方について述べた後、小泉元首相がその考え方にそって行動すればよろしいのではないか、というところまで書いていることもあって、これはおそらく、この本の中でもっとも必要性の低い論文になっている。ただし、このように直接的にはまったく関係のない人でさえ靖国問題について強い意見がもてることを示すことで、靖国問題が国家や社会という一般的な次元から溢れ出す、様々な個人的な考え方も関係している事実を悟らせる論文でもあるので、この意味においては参考になるものだ。

第3章「中国、日本、そして靖国神社の呪縛」では、宮崎大学教授、ワン・ジンシが中華人民共和国当局の視点について第1章とは違う形で論じる。特に、明治時代に日本を訪れた中国幹部の靖国神社に関する省察を紹介する節はもっとも興味深い部分である。そのほかは、中国政府の立場を無批判的に論文に繰り返し述べるので、学術論文よりもイデオロギーやプロパガンダのサンプルに近いものになっている。ただ、これも靖国問題における中国政府の立場を理解するにあたってたいへん参考になるものだ。特に、アジアの人々に多くの悲劇をもたらした戦犯が神として祀られているので「靖国神社が過去の侵略戦争を賞賛する」ものとしている。

第4章「中国における靖国問題の深みをはかつて」では、日中関係専門家のセキ・ヘイは、靖国問題に関する現中国政府の立場の限界と問題点を分析する。セキ氏は、現代中国のリーダーシップが徹底した理科系教育を受けた人々であって、精神の世界、とりわけ宗教的な観念をどうも理解できない人たちだろうと指摘する。したがって、靖国神社へ参拝する日本の政治家の精神的かつ宗教的な動機付けを無視し、それを単なる政治的な行為（それこそ、戦時中日本の軍事的帝国主義の賞賛）と見なす。確かに、北京にある毛沢東の礼拝堂は、宗教的な施設ではなく、完全に中国共産党の統治を正当化する装置であると述べる。セキ氏の結論は、やや大げさに、靖国問題に関する中国と日本の論争が、「文明の衝突」だという。この場合も、中国政府のリーダーたちの、宗教に関する心構えを把握することが不可能だとしても、中国当局が完全に無宗教的な立場を主張し続けてきて、他の国の人々の宗教的な考え方を理解しきれない可能性があることは、重要な指摘であるといえよう。

第5章「帝国の遺産—靖国問題について」では、東京大学教授の高橋哲也が靖国神社の歴史と国家神道の中の位置づけを批判的にまとめたのち、靖国で鎮座されている「英霊」が大日本帝国の拡大と天皇の神聖な統治のためにいのちを捧げたという理由のために神と

して祀られているため、靖国神社が近代国民国家日本の帝国主義と植民地主義との分離不可能なものである、と主張する。A級戦犯を神として祀る神社へ参拝する総理大臣は日本の戦争責任を否定しようとする印象を与えるのが当然のことだという。

第6章「日本の総理大臣はなぜ、靖国神社へ参拝したらだめなのか。個人的な管見」では、皇學館大学教授・新田均氏は靖国神社への参拝を全面的に支持する四つの理由を述べる。一つ目は、国家のためにいのちを捧げた人々に表敬し感謝するのが国民の義務と権利である。二つ目は、靖国参拝は日本国憲法が定める政教分離に反せず、戦没者への表敬を国家の伝統的な宗教に従って行うべきだ。三つ目は、靖国ではA級戦犯が単なる戦没者であり、ほかの戦没者とは特別扱いされることはないし、国家のためにいのちを捧げたという理由のためにほかの戦没者とともに祀られている。四つ目は、近代日本の歴史観と関係するのだが、戦後日本の公共教育制度が日本の近代史に対するあまりにも否定的なイメージを普及させたため、東アジアと太平洋戦争の正しい意味が忘れられてきた。特に、日本が独立国家として存在し続け、軍事勢力を実施してグローバルな植民地体制の崩壊を促し、西洋の大国と平和的な関係が結べる環境を作り、経済成長と生活状況の向上に携わることを可能にしたのは、戦没者の自己犠牲であると新田氏が主張する。

これは著しい弱い論点に見える。近代日本の戦争は、当時のプロパガンダはともかく、世界の平和、アジア諸国の独立と自由云々のためではなく、むしろ大日本帝国の優越性を世界に主張しようとする、暴力主義的な独裁政権の名で戦われたのではないだろうか。戦後の日本に自由、平和と経済発展をもたらしたのは、東条英機やその他のA級戦犯が代表する独裁政権ではなく、逆にその完全な挫折とその理念の徹底的な否定である。

第7章「靖国神社と歴史記憶の喪失」は、グリーン氏によるもので、この本のもっとも示唆に富む論文である。(違う形で「靖国：歴史記憶の形成と喪失」として『世界』2006年9月号で刊行された。) いままでは、靖国問題を主として二つの形で展開されてきた。一つ目は、総理大臣の靖国神社参拝の違憲の疑いであり、二つ目は靖国神社の祭神の中に東条英機を始めA級戦犯も含まれていることから生じる諸問題である。この論文で、グリーン氏はこれらとは異なり、靖国神社を歴史記憶装置として見なし、そこで実施される記憶・記念戦略を批判的に分析する。特に、焦点をあてるのは、靖国神社の主要な祭礼のシンボリズム、遊就館(靖国神社にある戦争記念博物館)の展示の戦略、また戦争の記憶にかかわる様々な資料の意味作用である。この新しいアプローチで靖国問題の本質に迫る。結論として、グリーン氏は、実質的な歴史記憶をめざすなら、靖国神社ではなく、また、千鳥ヶ淵ではなく、むしろ戦没者を別の、皇国史観や神道とは無関係の、まったく新しい場所で記念するメリットを主張する。

第8章「実現された約束—小泉首相、靖国神社、そして日本のマスコミ」では、北海道大学准教授のフィリップ・シートンは、2001年から2006年まで当時総理大臣であった小泉純一郎首相の靖国参拝に関する、日本のマスコミの報告の仕方を取り上げる。マスコミにも複数の異なる意見や視点が存在し、一般視聴者もそれらに反応をすることをよく示す論文である。

この本は、靖国問題の多面的な複雑性をまとめてくれる。多くの人々の個人的な信念、政治理念、歴史への判断などが様々な形でぶつかり合うという観点的な場として、靖国神社は近代日本の歴史の諸矛盾が露出するところでもある。

このように非常に複雑な状態を整理することはきわめて困難な課題であって、この本もいくつかの立場の相互対立を紹介するにとどまる。しかし、私は靖国神社が個人や集団の理念などを超越する、近代日本文化の基礎そのものを問いかける、莫大な「文化的」な問題になっていると思う。これに関して、もっとも顕著な問題はまず、下記の四点であると思われる。

1 国際関係上の問題としての「靖国神社」 マスコミで靖国問題が取り上げられると、多くの場合、それは「国際関係の問題として」である。特に、中国、韓国や北朝鮮の政府の反発がもっとも強烈である。(最近の日本訪問で胡錦濤主席が靖国問題を取り上げないことにしたが、これで問題が解決されたかとうてい思えない。) 靖国神社についての他の国の人々の考え方は非常に参考になるもので、日本人自身による靖国の理解を深める良好な切っ掛けになると思う。しかし、東アジアの地政学はいまだに猛烈な自国中心主義的・排他的な国政主義に左右されているので、このような立場を基盤にして日本を批判する国々の説得力が弱い。なぜなら、朝鮮半島の近代化や日本併合時代とその後の反日派と親日派の立場を明らかにしない限り、または中国では清時代末期から1970年代後半まで続いた内乱、破壊や虐殺をより客観的に考えない限り——要するに、すべてを他国のせいにする限り、これらの国から上がってくる声に耳を向けることは困難だろう。最近話題になっている、フランスとドイツでは共通の歴史教科書の作成・採択という案は、東アジアではほど遠い夢でしかない。

2 靖国問題と戦争責任 日本では近代史の教え方に対して、左からも右からも多くの不満があるようだ。この中で教科書認定委員会が選んできた道は、教科書をできるだけ内容的に浅いものにする事だ。そのもとには、議論をするほどの知的な素材を提供しない限り、大した興味が刺激されないという論理があったかもしれない。ところが、明日の日本人である日本の若い世代は、自分たちの先祖がやってきたことや近代日本の成り立ちを知る権利と義務がある。そのためにこそ靖国神社が建立されたのではないか。生きた歴史

は簡単なものではない。対立する意見と利権、不可避的な矛盾や逆説、不可逆の宿命的な決断もあったし、また、成功と勝利と喜びだけではなく、汗と血と挫折もあった。これらのことと、それらの力学的な関係を若い世代が知る権利がある。そこで、歴史教科書はいわゆる「出来事」だけではなく、それよりもむしろ「出来事」を教科書に入れるべきものとして選ぶ論理、そしてその「出来事」についての様々で、対立する考え方（解釈）を紹介すべきである。（ちなみに、私が生まれ育ったイタリアの高等学校では、歴史教科書の他に歴史観の教科書も設けられている。）

3 日本の「伝統」の位置づけ、意味、そして「管理者」の問題 いくら靖国神社が「日本の伝統」を代表すると主張されたとしても、この神社は事実として明治期になってから、しかも国家神道の傘下で設立されたものであることは否定できない。周知のとおり、明治期以降の国家神道とは日本において非常に長い歴史をもつ、しかも日本の宗教の主流だった「神仏習合」を全面的に否定し弾圧した結果として生まれた「作られた伝統」をなす新しい宗教であった。現代日本では、このような靖国「神社」が「神社」としてほんとうに必要なのだろうか。また、靖国神社という「伝統」はだれによって管理すべきか。いまのように、靖国関係の聖職者、遺族会、複数の右派集団などが靖国神社の意味を支配しようとするのだが、それゆえにこそ、靖国神社が真の意味での国民的なシンボルになり得ない。

4 現代日本における「聖なるもの」の問題 戦没者はなぜ、「神」として祀られなければならないのだろうか。日本の宗教史に前例のないこの現象は、1945年までの軍事的独裁国家体制にとって都合のいい手段だったかもしれないが、今の日本では、軍事体制との関係のある神主たちが、厚生労働省との承諾を得て、勝手に人間に神という神格を与えることが可能だと信じている国民はどのぐらいいるのだろうか。しかも、このように官僚的に「神」にされた人を本格的に「神」として祀る国民はどのぐらいいるのだろうか。これもまた、靖国神社が国民のシンボルになり得ないもう一つの理由だと思われる。逆に、戦没者を国家のために自分の大切ないのちを捧げた（あるいは、多くの場合、国家によってそのいのちが奪われた）人間として記憶させ記念させた方がいいのではないか。

これらの問題をあらためて、また違う観点で考える切っ掛けになるグリーン氏に編集されたこの本は、とても重要な本である。